



ヨーロッパの街角から

原発爆発

～その時、ドイツは～

私が震災情報に初めて接したのは地震発生からおよそ1時間経った頃だった。朝、テレビをつけニュース専門局N24を見ると、目に飛び込んできたのは田畑を覆い尽くす黒い濁流の映像。同局は地震発生から丸3日経った今も、天気予報とCM以外は途切れなく大震災を報じている。これほど濃密に特定のニュースを流し続けるのは2001年のニューヨーク同時多発テロ、そして多くのドイツ人犠牲者を出した2004年スマトラ島沖地震以来だ。

ドイツのテレビ情報は極めて早く、市原のコンビナート火災や大船渡の津波など協力関係にあるテレビ局（NHK、ANNなど）からほぼリアルタイムで映像が送られてくる。私はインターネットで日本の活字情報と映像も追っているが、場合によってはドイツのテレビ情報が一番早く、福島第1原発1号機爆発を知ったのもテレビだった。ここでは原発爆発に対するドイツの反応に焦点を絞って話を進めたい。

ドイツは原子力発電からの撤退を決め、運用年数の過ぎたものから廃止しているが、最近、経済的な観点から多くの原発の延命を決めたばかりだ。政府は延命の妥当性を強調し、当然、環境保全団体は強く反発。そこに入ったのが今回のニュースだった。反対派の反応は早く13日にはバイエルン州の原発を4万の「人間の鎖」が取り囲んでいる。

メルケル首相は原発は安全としながらも即座に全原発の点検を指示した。もちろん日本の抱えるリスクとドイツのそれは全く異なる。ドイツに地震はないから最大の懸念はテロ、それも航空機の激突だ。日本の原発が世界最高水準の安全対策を講じていることはドイツでも広く知られた事実。それでも重大事故は起きてしまった。ドイツが再確認した教訓は「考え得る最悪の事故に備えなければならない」ということだろう。今後は巨大旅客機の激突シナリオが、より切実に議論されるはずだ。

テレビには原子力発電の専門家や環境保全の専門家が代わる代わる登場している。繰り返し放送されるのは、爆発の決定的瞬間を捉えた映像（写真）と圧力容器の冷却水位が下がり爆発

する解説アニメだ。そして専門家が決まって言及するのは日本政府と電力会社の情報公開が遅く情報量が少ないこと。さらに、それに対し国民が不信感を抱いている点。事態収拾に尽力している方には別の主張もあるが、海外メディアの捉え方をまとめればこうなる。

最悪の場合、再度の水素爆発の可能性も取りざたされている（執筆直後、3号機爆発）。しかし世界が注目しているのは決して結果だけではない。結果とは別に、刻々と変わる状況に最善の判断を下しているか。加えて情報公開が迅速かつ十分かというプロセスにも強い関心を寄せている。

原発事故といえばチェルノブイリの名がまず思い浮かぶ。チェルノブイリは人類の愚かさや原発事故の悲惨さを象徴する負の記号になっているが、このままだと福島も間違いなく忌むべき言葉になってしまう。しかし、今後のやり方次第では福島が「原発事故対処の新しいモデル」になる可能性もある。長い目で日本の国益を考えた時、福島の名は絶対に後者の形で世界に記憶されなければならない。

当事者はぜひ、世界への情報発信義務を自覚しながら最善を尽くしていただきたい。事態収拾と本質的には関係ないものの、原発に限らない日本の危機管理能力の国際評価がことのほか高いからこそ、あえて指摘させていただいた。
／日本時間3月14日午前8時執筆

（在独ジャーナリスト 松田 雅央）



原発爆発を第一面で報じる全国紙
（3月13日付 Frankfurter Allgemeine）